
テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

サニーレタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

【Zコード】

Z6388Y

【作者名】

サニーレタス

【あらすじ】

吸血鬼・・・

ここ、ルミナシアではそんな存在は空想、または御伽噺と思われていた

そして誕生した・・・

イレギュラーな少年の物語・・・

作者初投稿です・・・よろしくお願いします

第1話（前書き）

作者初投稿です^ ^

できるだけ良い作品にしていきたいと思いつますので感想、アドバイスを良ければしてやってください・・・

ウリズン帝国・・・

そこで、ある物語が始まった・・・

ZOSHDE・・・

彼・・・

顔は中性的、そして長い黒髪を後ろで束ねており・・・少し暗さを帯びた青い瞳を持つ彼・・・。

名前はイザック・フーバー

生まれてすぐ親に捨てられてウリズン帝国の城下町の孤児院で育つた

フーバーは孤児院の先生がくれた名字だ

そして彼は学校に通いながら仕事をし、今まで孤児院で暮らし

ていた
だが・・・

イザックＳＩＤＥ・・・

「失礼します」

俺はある部屋に来ていた

先程仕事が終わり、孤児院に帰つてきたので部屋に行く途中
みんなから先生と呼ばれているリン先生が深刻な顔をして

『後で私の部屋に来な・・・』
と言われたからだ

そして先生の部屋に入るとそこには見知らぬ一人の騎士団の男が
立つており

先生の顔は苦虫を噛み潰したような悔しそうな表情をして
そして先生が・・・

「・・・イザック・・・今日からあなたは王立研究所の博士に引
き取られることになりました・・・」

そう言われた・・・

一瞬、体が固まつた

「・・・何故ですか？」

俺は先生に尋ねた

孤児院は俺の家だ、今更誰かに引き取られるなんて「ゴメンしたい」し
何よりこの孤児院を出て行きたくない

何より「引き取られることになりました」と先生は言つたが
・・・何故決定事項なのだ？

俺の意見も聞かず、強制的に連れて行こうとしている
しかも王立研究所は悪い噂が多い

最近では人を実験体にし、鬼畜な実験を行つてはいるとか・・・

少なくともそんな噂が立つてはいるところに望んでなんて絶対行き
たくない

俺がそう考へてはいるうちに騎士の一人が先生の代わりに答えた
「皇帝陛下直々の命令だ。研究所まで連れて行く・・・逃げれば・
・・わかるな？」

こうして脅迫をしてくる時点でおかしかつた

しかし・・・孤児院に・・・何より、恩人である先生に迷惑を掛けたくなかつた

俺は要求を呑むしかなかつた・・・

NOSHDE · · ·

「陛下・・・例の実験の代わりを用意できました」
金髪で皿に縦の切り傷がある男が言葉を発する
陛下と呼ばれた人
豪奢な衣に体を包み、黒い髪の上には豪華な王冠をかぶっている
ウリズン帝国皇帝のガンドである

「うむ・・・早速行くぞ」
「はい、今度こそ成功させます」
「当たり前だ!!」

実験の話をしている男性を怒鳴りつける

「私をいつまで待たせるつもりなのだ!!もう十一回目だぞ!!」
「はい、承知しております」
「・・・で?今回の”実験体”はどんな奴なのだ?」

怒鳴つても仕方が無いと思つたのか、王はまた実験の話に戻る

「・・・イザック・フーバー。17歳、180cm 66kg

生まれてすぐに

親に捨てられ、孤児院で育つています。孤児院の者には一応話を通しました

涉らましたが脅して口止めもしてあります。それに陛下と同じような体格ですので実験体には最適か と・・・

「ふん・・・なら早く始めろ・・・”人体吸血鬼化実験”をな・・・

・

にやりと歪めた口元にはとてつもない欲望が見えていた・・・

イザックSIDE・・・

あれから、お城の研究所に連れて来られた
俺は兵士が言うがままに動いていた

そして俺の目の前に二人の男が現れた・・・

ZOSHIDE · · ·

「 · · · · · 」

「 こ の 餓 鬼 か ？」

「 は い 、 こ の 少 年 が イ ザ ッ ク ・ フ ー バ ー で す 」

ガ ン ド が イ ザ ッ ク を 指 差 し 金 髪 の 男 に 問 い か け る

「 ふ ん 、 悪 い が 、 · · · 少 し 眠 つ て も ら う つ ぞ 」

そ う ガ ン ド が 言 い 放 つ た 直 後

「 · · · · ！ ？ 」

「 · · · ハ ツ ！ 」

皇 帝 の 横 に 立 つ 金 髪 の 男 が 突 如 こ ち ら に 突 進 し て き た

掛け 声 と 共 に 突き 出 さ れ た 拳 を イ ザ ッ ク は 何 と か 受 け 流 す が 、 · · ·

「 ハ ア ！ 」

「 が は つ ！ ？ 」

次 の 跳 里 は 先 程 の 拳 と は 段 違 い に 速 く 、 · · · 重 か つ た
腹 に も ろ に 跳 里 を く ら つ た イ ザ ッ ク は 為 す 術 無 く 倒 れ る

「 (こ 、 こ い つ 、 · · ·) 」

· · · 孤 児 院 で も 、 町 で も ど ん な 奴 に も 負 け た こ と は 無 い イ ザ ッ

ク は

そ の 事 実 を 信 じ ら れ な い で い た

学校の剣術、格闘術の授業では常に一番、大人にも負けたことが無いイザックだがこの男は油断していたとはいえイザックを一撃で立てなくしてしまったのだ

「ふむ・・・まだ意識があるか・・・」
「が・・・お前・・・なにもん・・・」

ここまで言い、イザックは気絶した

「・・・運べ」

そして気絶したのを確認するとガンドは研究室内に運ぶように命じた

第1話（後書き）

難しいです・・・

ぜひともじり意見待つてます！！

第2話（前書き）

2話目です・・・
難しい・・・ほんと二・・・

イザックSIDE・・・

「・・・・・」「は？」

真っ暗で何も見えない・・・

恐らくどこかの大きな部屋だろ？

「・・・・・・・・・・・・」

動こうとしたが手と足を拘束されていた
強い力で縛つてあり、解けそうに無かつた・・・
そこに・・・

「・・・・・？」

急に電気がつき、まぶしさに目を細める
周りを見ると古い感じで周りの壁には石が詰められていた

「ここは？」

「目が覚めたようだな」

「・・・！？」

上のほうから声が聞こえた

見るとそこには踊り場があり一人の人・・・ガンドと金髪の男が
立っていた

「・・・・・何をするつもりだ」

「ふん・・・愚民め、口を慎め」

「・・・・いきなり連れて来られて、こんな扱いをされて・・・事

情ぐらい知る権利は俺にはあるんじ ゃないか？」

苛立ちを抑えながら状況を問う

そして返ってきた言葉は・・・最悪のものだつた

「・・・お前には、ウリズン帝国繁栄のための・・・そして・・・

私の永遠の命の

ための実験体になつてもらう・・・人体実験のな

にやりとゆがめた口元を見て、背筋に悪寒が走つた

「（逃げるしか・・・）」

必死に拘束から逃れようと腕を動かす
しかしやはり解けそうな気配は無い

「・・・おい、始めろ」

「はい・・・」

そして・・・最悪の実験が始まつた

「おらあー

「つー?」

いきなり頭をつかまれ床に叩きつけられた
額からは血が流れてきた

「あひひひ・・・初めまして、イザック君
「・・・誰だ？」

気持ちの悪い声で俺の名前を呼んだ男は床についている俺の顔を
強引に上げると

気持ちの悪い笑みを浮かべた

「私の名前はエリック、今からこの、私が長年研究し続けてやつ
と完成した

『アムリタ』を投薬しますね？きひひひひ・・・

エリックは君の悪い笑いと共に・・・真っ赤な液体、『アムリタ』
を注射器に
入れる・・・

「ちなみに・・・今残念ながら、11人失敗しています。あなた
は成功してくださいね？きひひひひ

今・・・なんて言った？

11人失敗？

マジかよ・・・成功するのかほんとに？

「みんな『アムリタ』の拒否反応に耐えられなくて死んでしまつ
んですよ・・・薬が全くもつたいたいですよ、きひひ」

もう俺の中には恐怖しかなかつた

そして・・・じつは思つた

死にたくない・・・と・・・

「じゃあ・・・いくよー！」

そして・・・俺の腕に注射器が突き刺さり・・・
真っ赤なその液体が俺の体内に流れ込んできた

突如・・・激痛が俺を襲つた・・・
体は焼けるように熱く、視界が真つ赤に染まつた
吐き気がし、たまらずに吐血をする
頭が割れるように痛く、どれだけ叫んでも痛みは治まらない・・・
永遠に続くかと思われた痛みだつた・・・
しかし・・・急にそれがふつと和らいだ

「あ・・・あああ・・・」

叫びすぎて喉が潰れたのだろう声が全くない

そしてエリックは感極まつたように

「成功だよおおおーーー！」

と、不快な笑みを浮かべて喜びの声を上げた

それを見た・・・俺は・・・

急に・・・アイツヲ・・・コロシタク・・・ナッタ・・・

金髪の男 SIEDE · · ·

「おお · · · せ、成功したのか！？」「 · · · そのようですね」

隣で驚愕に顔を染めるガンド陛下 · · · いや、クズ

「よし、Hリック！その薬をわしに！ · · ·」「きひひ、もちろんですよ皇帝陛下『ザシユ』か · · · ？」

クズが薬を求めエリック博士を呼んだ瞬間 · · ·
エリックは言葉を止めた

いや、止められた

何故なら少年の手刀がエリックの胸を突き刺していたから · · ·

すげえな · · · 流石に大人一人手刀で突き殺すのは俺でも無理だ

「なつ · · · ！？」

「（はは · · · 面白くなつてきた）」

ペル、と唇をなめる

さあ・・・久々の戦闘を楽しみましょううか・・・

第2話（後書き）

見てくれた方には感謝を！
誤字脱字などがありましたら教えていただけすると幸いです（汗）

第3話（前書き）

初戦闘・・・どうか批判だけは勘弁をへへ

ZOSIDE・・・

「があ・・・ひい・・・！」

悲鳴も上げれずエリックは目から光を失い、倒れた
そして持っていた『アムリタ』も落ち、容器が割れて地面に染み
込んでいった

「あああ！－『アムリタ』が！－・・・おのれ・・・小僧！－！
！－！」

イザックは腕に流れてきた血をペロリと一舐めした
・・・彼らからは見えなかつたのだろう・・・イザックの口元が
緩むのを・・・

ガンドは目を見開き絶望した後、怒り狂つて

「殺せ！－ハつ裂きにしろ！－！」

そう近衛兵に命令した

それと同時に十数人もの近衛兵が部屋に入ってきて、最初から居
た兵士合わせると
二十人程となつた

そして・・・

「おらあ！－！」

「ハツ！－！」

二人の兵士がイザックを殺そうと飛び出した

一人は突き、一人は上段から剣を振り下ろした・・・が

その二つの剣はイザックに斬り裂くことはなかつた・・・

パキン、という音と共に剣を振り下ろした兵士の剣がイザックの手に掴まれ・・・

粉々に壊れた・・・

そして突きを繰り出した兵士の剣は地面に落ちていた・・・腕」と・・・

「なつ！？」

「ぐああああ・『バキイ』ぐえ・・・！」

剣が壊されたことにより驚愕する兵士、その間にもう一人の兵士は痛みに絶叫した 直後・・・イザックに顔面を殴られ・・・首が無くなつた・・・

否、上から殴つたため首の骨が胴体に陥没してしまつたのだ・・・どちらにせよその一撃で絶命し、その男の剣がイザックに渡つたそして

「・・・瞬迅剣」

イザックの繰り出した一撃はもう一人の兵士の胸を貫くには充分な一撃だつた

悲鳴を上げる前にその男も地に伏せた・・・

そして・・・イザックによる近衛兵たちの惨殺劇が始まつたのだつた・・・

金髪の男 S I D E • •

「な・・・わ、我が国の近衛兵が・・・」

惨殺劇が始まつて十分・・・

少年・・・イザック・フーバーの周りには死体、そして、致命的
な傷を負つたものしか残つていなかつた・・・

「お、お前だけが頼りだ。行け！！」

「・・・拒否します」

「は・・・？」

クズは俺に命令してきたが・・・もつ聞いてやる必要も無い

「・・・コロス・・・」

「ひつ！？」

いつの間にかこちらの踊り場に上がってきた少年
それを見てクズは小さな悲鳴を上げる

「コロス・・・」

「た、助けてくれえ！！」

「コロス・・・」

「なんでもする、なんでもしてやる。か、金か？」

「コロス・・・」

「金でも何でもくれてやるから・・・頼むー！殺さないでくれえ
ええ！！！」

「コロス！――！」

クズが叫んだと同時に少年は剣を振り上げ・・・クズの首が胴体
とお別れした

「・・・やるねえ」

口笛を吹きながらそういうが反応が無い

そして少年はぎりりとこちらを数秒睨み、突然笑みを浮かべたか

と思つと

・・・人とは思えない速度で襲い掛かつてきた

第3話（後書き）

やばいです・・・難しいです・・・

誤字脱字ありましたら報告してもらえたるにありがとうございます

第4話（前書き）

更新ですへへ；
見ていただけると幸いです

NOSIDE • • •

狂ったように剣を振り回すイザツク

その僕の速度 技術は『アーリタ』を食む前のものとは格段の違つていた

N/UN

「ああ、…」

袈裟懸けに斬り下ろしたイザックの剣を金髪の男はバツクステツ
ブで避ける

きをイザックに
繰り出す・・・

その一撃はイザックの頬を掠め、イザックは横に飛び退き距離を

「・・・薬の効果か・・・傷がもう治ってきてるじゃねえか」

金髪の男は楽しそうにそう言つ
見ると先程の頬を掠めた一撃は見る見るうちに回復していく

「吸血鬼……か……あのクソ野郎、気に食わなかつたけど面白いもん残して言つたな……」

そういうと笑みを深めて舌なめずりをした

「俺の名前はキラ。キラ・エクスだ……覚えとけよ?」

金髪の男、キラはそう言い終わるとまた剣を構えた

「わあ……楽しましてくれよ?……魔神剣!!--」

そして、また戦闘が始まった

「……(ギイン)……陽炎」

「おおつと!」

イザックはキラの魔神剣を剣で弾くとキラの真上に瞬間移動してから膝落としを繰り出す

「守護方陣……」

「ぐはつ!」

それをバックステップで避けるが守護方陣によりダメージを受ける

「ちつ……雷神剣!」

「(ガキン)……!?」

だがそれでは終わらずキラは剣を突き出し落雷がイザックを襲つた突きは剣で弾けたものの落雷を受け、全身にダメージと痺れを受ける

「ちつ……薬飲んだとはいえまさかガキに一撃いれられるとは……」

•
•
L

• • • • •

「ああ……ここや……それなりにちも、ちよつとばかり本

「氣を出そーかな」

一瞬でキラの雰囲気が変わる

俺・・・実は魔法剣士なんだよね・・・」

そう言い終わると突如、キラの足元に魔法陣が浮かびだした

よな・・・

できなことにつ

۹۷

殺氣の密度が上がり、思わずイザックは後ずさりする・・・

「詠唱時間は普通の三倍強掛かるが・・・剣術もそれなりに使える俺にはたいしたデメリットのはならない・・・そして、お前がここに上がつて来た時すでに詠唱は始まつてんだよ！――！」

キラはまた笑みを深くし

「耐えうよ・・・行くぜ・・・！・・・インティグネイシヨン！――！」

ヨン！・！・！・！

刹那、研究室に裁きの雷落とされ、周囲は土煙に包まれた・・・

崩れた研究所の瓦礫の上に立つ人影・・・

「・・・やり過ぎた・・・しかも逃げられた・・・

はあ〜、と溜め息をつくキラ

「まあ・・・いいか。とりあえず戻るか・・・」

そして歩いていく

ふと、キラは足を止めた・・・

「次会つときは・・・もつと楽しましてくれよ・・・イザック」

そう呟くと今度こそ歩き出し、研究所から姿を消した・・・

イザックSIDE

「はあ・・・はあ・・・はあ」

イザックは走っていた足を止め、息を整える

「（なんだ・・・やつきの感覚・・・）」

あの・・・エリックとか言つ男を・・・いきなり殺したいという
衝動が襲つた

そして、気が付くと殺してしまつていた・・・

そしてそれを・・・心から楽しいと思つてしまつた・・・

それからは、体が言つことを聞かなかつた・・・

イザックは思い出していた・・・
人を斬つた、あの感覚を・・・

「（俺は・・・）

やるせない気持ちに俺は拳を強く、強く握り締めた

そして、雨だ振ってきた音と共に城では研究所が破壊されたことによる騒がが起っていた・・・

第4話（後書き）

インディグネイションを使わせたのは・・・作者が好きだからです
^ ^

かつこよくないですか？インディグネイション^ ^

誤字脱字がありましたら報告お願いします
もちろん感想もしていただけると嬉しいです

第5話（前書き）

といつあえず更新へへ；

第5話

ZOSHIDE · · ·

「なんだ・・・」これは・・・

騎士を十人ほど引き連れた恐らく騎士団隊長と思われる男が呆然としながら呟いた無理も無いだろう・・・
いきなり轟音が鳴り響いたと思えば、城の敷地内にあつた研究所が瓦礫の山になつてゐるのだから・・・

「だ、団長・・・」

「なんだ・・・つ・!?

一人の騎士に呼ばれそちらを向くと兵士の田線の先には・・・皇帝の生首が
転がつていた・・・

「へ、陛下・・・一体、何が・・・」

転がる首を見ながら呆けていると

「隊長!—この近衛兵まだ息があります!—!」

そんな声が聞こえた・・・

団長はすぐさま声を上げた騎士の元に走つた

「おい!近衛兵!—何があつた!—!?

今にも消えてしまいそうな呼吸をしながらつづくと田を開けた
一人の近衛兵

そこまで言い終えると近衛兵は力尽きた
しかしその情報で団長は全てを悟った・・・

「（実験が失敗しただと！？・・・しかも、被験者は逃走？・・・この惨状を見る限り能力を得て逃走した・・・となると・・・）・・・・・まずいな・・・・」

騎士団長も実験のことは聞いていたようだ
そして団長は最悪の結果を想像していた

「おれは、おまえのことを、もう少し、見ておきたいんだ」

「今日、ここに連れて来られた被験者の名前は？」
「はっ！、イザック・フーバー、17歳です。私が連れてきたの
で間違ひありません」

「そうか・・・恐らくそのイザックとやらがこの事件を引き起こしたらしい

騎士団全班を召集！その男の身柄を拘束する！至急だ！！急げ！

兵士は敬礼を済ますと駆け足でその場を去った

「（もし・・・もし吸血鬼化に成功していたら・・・・・報復にやつてくる可能性がある・・・これだけの戦闘を行つた今なら拘束できるかもしれない・・・その後は・・・城で幽閉させるか・・・」

団長は頭を抱えていた

そして、先程から降っている雨が一段とまた強くなつた・・・

イザックSIDE・・・

雨が降つていた・・・

しかしそれでも俺はその場所から動けずにいた・・・

人を殺したという事実・・・殺人をしたというのにそのときには
楽しさ・・・

快樂までも感じてしまつていた事実・・・そして・・・返り血を
浴びて・・・

血を口に含んだときの・・・とてつもない力が溢れてきて・・・
制御できなかつた事実

そしていつの間にか溜まっていた水溜りに目を向けると・・・ イザックは驚愕した・・・

漆黒の闇のように黒かつた髪は正反対の雪のように白く染まり、美しい青色をした両目だったのが、左目だけ炎のような真っ赤な赤に染まっていた

そして・・・口をあけると・・・鋭利にとがつた・・・犬歯があつた・・・

「ああ・・・そつか・・・俺・・・」

もう・・・・・・化け物になっちゃったんだ・・・

第5話（後書き）

イザック吸血鬼化・・・

さて・・・」の後どうしようか・・・（汗）

まあがんばつて更新します^ ^

誤字脱字の報告、感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第6話（前書き）

とうあえず投稿へへ；

イザックSIDE・・・

途方に暮れていた俺はただ歩き続けた・・・
気が付くと・・・俺が育った孤児院の前だった・・・

「・・・は・・・いまあら向しに来てんだか・・・」

自嘲したように笑う

「・・・・・」

そして、孤児院に背を向け歩き出そうとしたそのとき

「イザック! ! !

・・・そこにはいつも服ではなく戦闘用の軽鎧に剣を携えた孤児院の先生の姿があった・・・

騎士団長SIEDE・・・

「・・・まだ見つからないのか！！」
「す、すいません・・・まだ捕捉できていません」

イライラしながら部下の報告を聞く
このままでは取り逃がしてしまつ・・・
一刻も早く被験者のイザックを捕らえなければ・・・

「（あの数の近衛兵を一人で倒した・・・完全に回復してから攻
められてはひとたまり無い・・・）」

未知の力を持つイザックに恐怖を覚える団長
だからこそ、今捕まえておきたかった
そこに・・・

「団長！－被験者イザック・フーバーを捕捉しました！－！－
「ど－だ－！」

「被験者の住んでいた孤児院前の路地です、三個小隊が今向かい、到着しだい迎撃するようです！」

卷之二十一

「」「」「」「」「」

団長の言葉に敬礼を返し、どたどたと音を立てて部屋から出て行つた・・・

イザックSIDE・・・

「あ・・・」

「イザック・・・」

頭が真っ白になった

「・・・なんで・・・」

「?」

「なんで・・・俺つて・・・」

俺は今の容姿を見て一瞬でイザックだとわかつた先生に驚いていた
た・・・

それを聞いて先生は

「あんたの髪の色や眼の色が変わってても・・・何年も一緒にい
ればさすがにわかるよ・・・」

そういう先生は微笑を浮かべた

「それよりあんた指名手配されてるよ?・・・何があつたんだい

?」

「・・・・・・・・・・・・・・先生・・・俺・・・・・

そして俺は、つにわつきの出来事をすべて先生に話した

人体実験を受けさせられ、化け物になつたこと……そしてその力でたくさんの人を殺したこと……血をなめると……おいしいと感じる……化け物になつたこと……

「……俺……怖いんだ……自分が

「イザック」

名前を呼ばれ、体が震えた

「大丈夫だ」

そして力強く一言、そう言い放つた

「……なんで……そんなことわかるんですか？」
「あたしは……あんたのこと信じてるからや」

「信じてる」……先生はそう言つた……

まだだ……この人は……根拠も無いのにそんなことを言つて……

・

……それにどれだけ救われ、どれだけ嬉しかったことか

先生は俺のさつきの話を聞いても……変わらずに接してくれた

「先生……」

自然と涙が流れた……

さつきのような悲しみの涙ではない……

「・・・泣くんじゃないよ、全く・・・」

先生は呆れたように言いながらもビームが嬉しそうに微笑んでいた
そのとき・・・

「イザック・フーバーだな?」

ぐぐもつた声が聞こえた

そしてそこには・・・三十人は超える人数の騎士が武器を構え立
つていた・・・

第6話（後書き）

・・・先生については説明する回を作ったほうがいいかな?
感想、アドバイスを頂けたらたら幸いです

第7話（前書き）

はい・・・孤児院の先生が・・・

続^クきは本文でどうぞ！

ZOSIDE・・・

「・・・」

「おとなしくついて来い、さもなくば・・・」

一人の兵士がこちらに歩み寄る

「・・・わか「待ちな」・・・!？」

おとなしく捕まろうとしたイザックだつたが・・・先生が言葉を遮り一步前に出た

「なんだ?」

「・・・この子を孤児院を脅してまで無理やり連れて行つて、人體実験を行いこの子を苦しめたあんたたちに・・・あたしが返すと思つのかい?」

先生の顔には・・・明らかな怒氣が含まれていた

「・・・孤児院がどうなつてもいいのか?」

そして、騎士は一番効果的だと思われる孤児院の名前を出した・・・

しかし帰ってきたのはかすかな笑い・・・

「はつ・・・もつ他の子達は違う場所に移したよ・・・」の子引

き渡してからあたしは助けに行くつもりだつたからね・・・大事な大事な・・・息子をね・・・

先生は優しくそういった

「先生・・・」

「逃げな、イザック」

一言、先生はそう言った

「でも先生！この数は・・・」

「大丈夫だよ・・・あんたに剣を教えてたのは誰だと思ってんだ
い？」

先生は振り返りイザックにそう笑いかけた

「・・・・いきなり孤児院を人質に取られたから対処できなくて・・・
・悪かつたね・・・辛い思いをさせて・・・」

「先生・・・」

「港町の近くの森の中にはあたしの友人、エルフのルナ、つていう
あたしの古い友人が居るそいつのところにまずは行きな・・・いい
ね？」

小声で先生はイザックに言つ

何かを言おうとするが、うまく言葉にできず押し黙つてしまつイ
ザック

「もう行くんだね・・・困まれる前に」
「・・・ありがと・・・『じぞいました』

頭を下げる、そう言った

「・・・早く行きな・・・」

・・・イザックは背を向けて走り出した
だから気づかなかつた
先生が涙を流しているのを・・・

「追え！――」

イザックが走り出した姿を見た騎士が声を張り上げ、イザックの
後を追うが・・・

「待ちな

「邪魔するな！！」

進路を阻んだのは一人の女性

先程イザックを逃がした孤児院の先生である
そして、威勢よく斧を振りかぶりながら突進した騎士・・・
しかし、その斧は先生に届くことは無かつた・・・

「がはつ・・・」

・・・いつの間に斬ったのだろうか

斧を持った騎士は脇腹から血を流し、前のめりに倒れる

後続の騎士はそれを見てたじろいだ

「かかってきな・・・あの子が遠くに行くまで・・・時間稼がせてもらひづよーーー！」

「なめるなあ！！」

「虎牙破斬！ーーー！」

袈裟懸けに剣を振るつた騎士だが先生は後退することなく、体勢を低くし流れるような動作で懷に入り込み、技を繰り出した
そして、騎士は反応することも叶わず一回の斬撃を受け絶命した

「・・・」

「次・・・」

その気迫は孤児院の先生をやつているものとは思えないほどのも

ので

騎士を睨みつけるその目は、視線だけで人を殺せるんじゃないかも

と思つほどに鋭くなつていた

「怯むなあ！！連携して攻撃をしろーー！術師、詠唱準備ーー！」

そして、騎士団と一人の女性の戦いは苛烈を極めるものとなつた

騎士団長SIDE・・・

「・・・なんだこの惨状は・・・」

イザック・フーバーが捕捉された場所に着いた団長

そこには、多くの騎士の屍と・・・血塗れで拘束されている孤児院の先生の姿があつた

「……」の女が……イザック・フーバーを逃がし、なおかつ
騎士団に大きな損害を『えました……』

疲れきった声で報告したのは先程指揮を取っていた小隊長である

「被害は？」

「……死者23名……重傷者3名です」

「……」

団長は言葉を失った

先にこの場所に向かわせた人数は32名
しかし、そのほとんどが彼女によつて帰らぬ者となつていたのだ

「……処刑しろ、その女は危険すぎる」

「はい」

そして……騎士は彼女に歩み寄つた

「（イザック……）めんねえ……まともな母親できなくてさ……」

「（かばつてやれなくて）めんよ……あの糞研究者ども
にお前を売つた

あたしが言つのもなんだけど……）……幸せになつとくれよ

その言葉を最後に……先生は舌を噛み切り……息を引き取つ
た……

「・・・自ら命を絶つとは・・・本当に何者だ?この女は・・・」

口から血を流し、呼吸を止めてしまった女性を見ながら、今やるべきことに集中することにした

「イザック・フーバーを探せ!決して一人で動くな!何かあつたら逐一報告しろ!」

「いいな!?」「ハツ!—!—!」「」「」「」

そして騎士達は団長の言葉に敬礼を返した後持ち場に戻った

第7話（後書き）

先生無双・・・になつたかな？

感想、アドバイスしてくださいと嬉しいです！

第8話（前書き）

短いですが投稿・・・

イザックSIDE・・・

俺は走った

全力で

するとすぐに町の外に出ることができた

町の入り口で・・・俺は足を止めた

・・・幼くして捨てられていた俺を、一生懸命育ててくれた先生

・・・剣に興味を持った俺に嬉しそうに剣を教えてくれた先生

・・・最後まで・・・俺のことを考えてくれた先生

そんな先生に・・・感謝を込めて・・・

「・・・ありがとうございました・・・」

震える声を絞り出しながら深く、深く頭を下げた・・・
きっと先生に会うことは一度とないだろう
だからこそ・・・深く、深く感謝をした・・・

先生に助けられたこの身を大事にしてこゝへとを心に誓つて・・・

そして、先生に言われたとおり、港町の近くにある森に向けて走り出した

ZOSHIE・・・

無事に町を脱出し、港町近くの森を着いたイザック

そこには、暗い雾囲気の森があつた

「 いじか・・・

イザックは一歩足を踏み出し森の中に入つていった・・・

時々襲つてくる魔物を撃退しながら森の奥へと歩を進めるイザック

「……何処にいるんだろう？」

案外広いこの森を探し回るのは少々きついものがあった
そんなことを考えていると

「……誰だ？」

突然とても澄んだ女性の声が聞こえた
その聲音は明らかに警戒を含んだものだった

「……俺はイザックといいます……孤児院の先生に言われて
エルフのルナさん
がここにいると聞いてきました」
「孤児院の先生……？……まさか」

すつと木の影から姿を現したのは女性

長い銀髪をポーテールにしていて、整った顔立ちだがエルフの特徴であるその長い耳が印象的だった

「まさか・・・リンの孤児院の子か?」

「・・・はい」

イザックは女性の問いにはつきりと答えた

「・・・来な・・・事情を説明してもらいつ」

女性は先生の名前・・・リンとこの名を聞き、まだ警戒しているもの

話を聞いてくれるようである

イザックは黙つて彼女に従つた

第8話（後書き）

新キャラ登場です

テイルズにはハーフエルフの仲間はたくさん出でますが・・・エルフの人つていたつけ？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^ ^

第9話（前書き）

投稿です

見てもらえると幸いです^_^ ;

イザックSIDE・・・

女性の後を追つていると小さな家が見えてきた

「……」こがあたしの家だ、入りな

「……お邪魔します」

ドアを開け、入るように促す女性
俺は一言そう言い家のの中に入った

「……座りな」

家に入ると中には者がほとんど置いてなく、テーブルと椅子そしてキッチンがある
だけであつた
そして言われたとおり俺は椅子に腰を下ろした

「……まず……あんたが探してゐて言つルナつてのはあた
しだ・・・
あんた・・・イザックと言つたね?・・・リンがここに人を寄越
すなんて
よほどのことでもない限りない・・・それにその日・・・普通の
人間のものじゃない・・・何があった?」

エルフの女性・・・ルナさんはこちらをじっと見たまま俺の返答
を待つていた

「・・・俺は・・・先生の孤児院の子で・・・昨日・・・城の研究室に無理やり引き取られて・・・人体実験を受けました・・・そしたら・・・」

「その体になつてた・・・つてことか?」

「はい・・・それから急に・・・研究者たちへの殺意を・・・抑えられなくなつて

・・・研究所にいる奴たちを皆殺しにした後・・・逃げました・・・

「それで?」

「・・・偶然先生と会つて・・・あなたに会いに行けといわれました」

「・・・・・・・もしかしてさ・・・その研究者の名前はエリックだつたかい?」

「!?・・・はい」

ルナさんは俺の話を聞いた後少しの間考えたかと思うと、あの・・・

最悪の研究者の名前を口にしたことにして、俺は驚愕した

「ちつ・・・最悪だな・・・」

「・・・何がですか?」

俺は気になつていた

彼女がエリックという名を知つてることに

そして確信した

彼女は何か知つていると・・・

「・・・アムリタ”だろ?あんたが投薬されたの・・・

「・・・・・・・」

「その顔を見るとやつぱつやつだね・・・

はあー、と溜め息を吐きルナさんはこちらを見た

「あんたは・・・”吸血鬼化実験”の被験者になつて・・・成功
しちまつたんだね
・・・」

俺はルナさんの言葉を理解できなかつた・・・

「ヒリックつて奴はあたしがまだ研究者だつた頃に知り合つた奴
でね・・・

研究のことになるととにかくやばい奴だつた・・・それからあた
しは研究者を

辞めてここで暮らしてたんだけどね・・・一年前、あいつがここ
を訪ねて来たんだ よ・・・『ヒルフの飲み薬』を寄越せつてね

「・・・・・・」

「はじめは拒否したんだ・・・だけど・・・リンの孤児院を潰す
つて言われたら

・・・折れるしかなかつたんだ・・・そしたらあたしの血までほ
しいとか言い出してさ理由を聞いたら・・・あいつはこう言つた
よ・・・」

『永遠の命を持つ・・・吸血鬼になれる薬を作るんだよお・・・
キヒヒヒヒヒ』

「・・・・氣味悪かつたさ・・・そして、完成したのが”アムリタ

あたしはすぐに解放されて戻つてきた・・・つまりあんたは・・・
”吸血鬼”

になつた・・・つてことだ

「・・・・・・・・・・・・・・ そんなもの・・・あるわけ・・・

「あるんだよ・・・」

あるわけ無いと、信じたかつた

だがその小さな呴きもルナさんによつて否定された

「・・・エリックはね、この世でたつた一人・・・ 錬金術を受け継いだ奴だつたん だ・・・”アムリタ”は錬金術のみで作ることができる靈薬で・・・

不老不死の力を得ることができる・・・だから・・・

そこでルナさんは言葉を切つた

理由はわからないが・・・俺の頭にはもうルナさんの言葉は入つてこなかつた

「・・・あんたは・・・血を舐めたかい?」

ビクツと俺は肩を震わせた・・・

「そりゃい・・・血を舐めたら体が・・・軽くなつただろう?・・・身体能力が上がつていただろう?・・・全部、吸血鬼の衝動なんだよ・・・」

ルナさんは淡々とそう述べていった

おれは・・・最後の希望を持つてルナさんにこう問い合わせた

「元には・・・人間には・・・戻れますか・・・?」

そう問い合わせルナさんの顔を見た

数秒、深刻な顔をした後・・・首を振った・・・

横に・・・・・

俺はそれを見た瞬間意識が遠のいていった・・・

ルナSHIDE・・・

「・・・酷だったね・・・やつぱり・・・

いろいろあつたのに加えていきなり化け物といわれ・・・これだけ考えさせられたら・・・

「・・・リンせきつと・・・」

旧友の彼女を思い出す

清楚なイメージだった第一印象とは裏腹に、やんちゃで活発で責任感が人一倍強かつた彼女は・・・今

「（・・・エルフの耳つて・・・こうこう時・・・嫌だよね）」

彼、イザックが来てから町の情報を聞いていた

エルフは耳がいい

ルナは耳を強化し、町で出でている情報を探っていた
その情報のほとんどが彼の検索結果だつたが・・・
その中に・・・

『孤児院の先生が騎士団に反逆し、死亡』

こんな情報が聞こえてきた・・・

「（リンは・・・優しすぎるとねきっと）」

この子が追われてこるといふのを見ると・・・逃がすために時間を稼いだのだろう

そして・・・私のところに来させた

そしてリンは・・・责任感と愛情を胸に・・・死んで行つたのだ

うつ・・・

「・・・安らかに眠りなよ・・・じばいへの間は・・・この子を

任されてあげるよ・・・」

親友の死に流れる涙を拭おうともせず、ただただ涙を流し続けた・

•
•

第9話（後書き）

暗い話でした・・・

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^ ^

第10話（前書き）

イザックの眼の話です・・・

批判とか来ないか心配です^_^；

イザックSHDE

暗い
・
・
・
暗い場所だつた

自を凝視して周囲を見ながらやけに仕事見方かい

突然・・・明かりがついた・・・

その二十一

そこには右手

エリックの胴体があつた
その姿に思わず小さく悲鳴を上げる

「実験本こなれ・・・愚民め!!!」

「うめかー！」

そしてもう一人……」ちらはガンド皇帝……同じく首を持つ

「 たま
・
・
・
」

「わざ」

「ひひひー？」

「ー？」（ビクッ！…）

「…・・・・・あ？」

周りを見ると・・・見知らぬ部屋に一人の金髪の少女が泣きそうになりながら立っていた・・・

「（夢・・・か？・・・つ、それより・・・）・・・悪い・・・
びつくりさせちまつたな・・・」

「・・・大丈夫・・・です」

少女は涙目ままながらもそつ返してくれた・・・

「・・・ルナさん・・・呼んできます」

そう行つて少女は部屋を出て行つた

数分後・・・

「起きたかい？」

「はい・・・すいません」

「謝ること無こと」

先程と違い、柔らかくなつた雰囲気でルナさんは笑いかける

「・・・気分は？」

「・・・正直、悪いです・・・」

「・・・だらうね・・・はい」

ルナさんはおもむろに俺に何かを差し出した

「・・・これは？」

「眼帯だよ・・・あんたその左目の影響で魔力を常に消費してゐる
んだよ」

ルナさんは俺の左目・・・色が変色したほうの目を指差しながら

「あんたの目・・・かつて、吸血鬼が持つていたとされる眼・・・
いわゆる”魔眼”ってやつだね・・・その眼には能力があるんだ」

「能力？」

「ああ・・・一つは暗示と幻覚、異性には先の一ひとつと共に好意の

錯覚をもたらす能力」

「二二三つ目は身体能力の増加、これは解放して無くとも一緒にだけど解放したときは比べものにならないから」

「三三三つ目は……得意属性の見分け……今のあなたの目はその状態になっている

右目閉じてみな……」

言われたとおり右目を閉じると……

「……！」

「あたしはどんな感じだい？」

「……ほとんどが青ですが……緑と……黄色が少し混ざって見えます……」

「そりだらうね……あたしの得意な属性は水、風と土は基本程度使える

分かるかい？」

「つまり……色で属性が分かれていると？」

「そういうこと……赤なら火、青なら水、緑なら風、黄色なら土、紫なら闇

白なら光、桃色なら回復術、灰色なら補助術……そしてその色の濃さによってどれだけ

強い術使えるか……こいつた見分け方ができるのさ」

「……よく知つてますね」

「……Hリックが奪つて行つた文献の情報だからね……」

ルナさんは少し顔を曇らせながらそう答える

「……恐らく、その二つの能力があんたの”魔眼”についてる……

「…わかりました、ありがとうございます」
制御方法はわからないから…これから練習するしかないね

「…言つて俺は立ち上がる…が
ルナさんに手で制された

「…まだ何か?」「
どこ行くんだい?」

顔を真剣なものにしてこちらを見るルナさん

「もう行きます…お世話にならないな」…

別れを告げようとした瞬間言葉をかぶせられ出て行くとを許されなかつた

「お話も聞けましたし
「…まだ眼の制御できないじゃないかい
「…これから練習しますよ…」
「あんた一人でかい?」「
「ええ」

そう答えた瞬間胸倉をつかまれた

「…餓鬼が大人ぶつてんじやないよ…」

すさまじい威圧感に俺は思わず押し黙つた

「…そんな顔して…そんな心で…一人でいようとす

るんじゃないよ」

「・・・・・」

「あんた・・・・・リンが困つてたの・・・知つてるかい？」

「？」

ルナさんは少し笑みを浮かべながら「うつむいた

「『私の息子は・・・どれだけ辛い』ことされても・・・絶対にあたしに言わない・・・

子供らしく甘えたつていいのにね』・・・つてね・・・何年か前に来たときにそう言ってたよ」

「・・・・・・」

「・・・・・あんたは・・・背負い込みすぎだよ・・・まだ弱いくせに」

ルナさんの威圧が消えて・・・まるで先生のように優しく俺に笑いかけてきた

「・・・・・ここにいな・・・せめて少しでも傷が癒えるまで・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・やつぱり・・・見かけによらず涙もろいんだね」

「え・・・・？」

いきなりルナさんがそう言いだしたので思わず呆けた声で返事を返す

そして頬を触ると・・・温かい雫が流れていった・・・

「・・・・・リンほど器用に親できるなんて思わないけどさ・・・あんたはもう少し甘えることも必要だよ・・・ずっと気張つてたら・・・しんどいじゃないか」

優しく・・・頭に手を乗せながらルナちゃんはやうに

「・・・やつをいた子の相手もしてあげてほしにしや・・・
わい少しつ・・・」」なよ・・・」

「・・・はい」

止めたいのに・・・止まらない涙

無くなつたと思っていた俺の居場所ができた気がして・・・
素直に嬉しかつた・・・

第10話（後書き）

どうでしたか？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^ ^

第1-1話（前書き）

今回はコソの弱点（？）が判明・・・

テイルズにはやはりこのキャラがいなくては^{へへ}

イザックSIDE・・・

「・・・すいません」

「いいよ・・・」「リイ！おいで

ルナさんは泣き止んだ俺を見て薄く笑つた後、女の子の名前を呼んだ
ドアが開き、そこから姿を現したのはさつきの少女だった

「・・・（ペロッ）」

少女は俺にお辞儀をしながらルナさんの後ろに隠れてしまった

「いらっしゃり・・・悪いね、この子人見知りする子でぞ・・・」
「いえ・・・全然気にしません、しばらくここでお世話になるよ・
・よろしくね

「コリイ・・・」

「はい・・・よろしくお願ひします」

小さな声だつたがそう答えてくれた

ZOSHIDE . . .

「 . . . ハリイ、そっちの皿取つてくれ」

「はい」

「 . . . しかし意外だね . . . あのリンの息子なのに料理ができるなんて . . . 」

ルナさんは感心したように椅子に腰掛けながらそつ言つてキッチンを見る

「 . . . 先生に作らしたら . . . 孤児院の全員の人が食中毒になりますよ . . . 」

「だね . . . 」

補足すると . . . リンは洗濯や掃除などは完璧だったが . . . 料理がからつきしだった

最初は苦笑を返していたイザックだが先生の料理を思い浮かべた瞬間

「顔色が悪くなつた・・・

ルナも思い当たる節があるのか青い顔で同意を示していた

「・・・?」

もつろぐ口調は何かわからず首をかしげていた・・・

「はい・・・とりあえずある材料でしたが・・・『オムレツ』です」

「・・・美味そだね」

「・・・美味しそう」

「どうぞ」

「・・・いただきます」

一人は出来上がった料理を口にし・・・ルナさんはイザックを凝視して一言

「・・・ほんとにリンのとじで育つたのかい?」

「・・・年長者が作るしかなかつたもので・・・」

ありえないものを見ているよつにイザックを見るルナさんに苦笑
を返しつつ

「コリイに目を向けた

「コリイ・・・どうだ?」

「・・・先生のより美味しい・・・」

「・・・コリイ・・・」

「(ビクッ!)・・・」

その発言にいい笑顔でルナさんはコリイを見た

・・・瞬間「リイはす」い速度でイザックの後ろに隠れた・・・
オムレツを持って・・・

「ま、まあまあ・・・」

「・・・全く・・・でもほんと美味しいよ」

「良かつたです」

はにかんだ笑いを返すイザック

「・・・明日から眼の制御始めていくから・・・あたしも”魔眼
”の制御なんて

”初めてだから・・・一緒にやつていい、いいね?」

優しく・・・安心させてくれる微笑みを浮かべるルナ

「はい」

イザックもまた微笑みながら、ルナの言葉に頷いた

第11話（後書き）

短いですが投稿・・・

テイルズには××料理人がいなくては！！

ちなみにルナさんは違います^ ^ ;
一応作れるといった感じです

第1-2話（前書き）

本日一回目の投稿！！

ルナSHIDE・・・

「・・・」

目が覚めた・・・

私は必ず夜明けには目を覚ます

長年の習慣だ

「・・・顔でも洗つてくれるかね」

自分のベットから降り、居間に出ると・・・

「・・・ふあ・・・おはよう」「わあこまます」

「・・・あんた起きてたのかい?」

イザックがすでに起きており、朝食の準備をしていた・・・

「・・・夜は・・・寝れないみたいですね・・・」

「・・・そうかい・・・で?今眠いと?」

「はい・・・」

本当に眠そうな声でイザックは答える

一般的に知られている吸血鬼の印象どおり・・・

吸血鬼は夜に強く・・・朝に弱い

「・・・ま、練習するの夕方にして、後で寝てきな

「……すいません」

大人っぽい印象だつたイザックだつたが……

「（こいつしてみると……やっぱり年相応だね）」

しつかりした子だと思つがこいついた一面を見ると自然と笑みが浮かんだ

「コリイ起こしてくるよ……食べたら寝ときな」

「…………」

「ひ……もひ寝てるのかい……」

呆れた視線を送るもイザックは夢の中だ

「……ちよつとずつ……慣れてくれるかね……」

この調子なら心配なさそうだと私は少し安心した

夕方・・・

ゆわゆわ、と寝ているイザックの体が揺れる

「・・・・ん？」

「・・・ルナさんが・・・呼んでます」

イザックが目を開けるとそこにはコリイが立っていた
外を見ると景色が茜色に染まっている
夕方になつたので起こしに来てくれたようだ

「悪い・・・ありがとな」

「いえ・・・大丈夫です・・・」

「コリイはまだぎこちないものの笑顔でそう答えてくれた

「すぐ行くなつて伝えといてくれ」

「（コクッ）」

イザックはコリイにそう言い着替えを始める
コリイは頷くとルナの元に走つていった

「よし・・・あんた、魔術は使えるのかい？」

「・・・それなりに」

「魔力の制御つてやつたことあるかい？」

「いや・・・」

「だるうね・・・その年で制御できたらたいしたもんだよ」

けらけらとルナは笑う

「瞑想が一番効果的だね・・・とりあえず2時間」

「い、いきなりハードじゃないですか？」

ルナが出した方法にイザックは軽くううたえる

「・・・いいからやるーちなみにちゃんとできるかできてない
かはあたしが
見分けることができるから・・・魔力乱れたらこの棒で・・・わ

かるね？」

「でも・・・いい笑顔で肩にじつい棒を担ぐルナ・・・
イザックはから笑いを漏らし・・・現実逃避していた・・・

数分後・・・
鈍い音とイザックの悲鳴が森に響いたのは言つまでも無い・・・

第1-2話（後書き）

最初が暗すぎたので、少し平和な感じを出していきたいと思っています
^ ^

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^ ^

第1-3話（前書き）

・・・少し悩みましたが投稿！

コリイの正体が明らかになります

NOSIDE・・・

イザックがルナの元に訪れて一週間が経った
ここはルナの家の庭・・・そこには二つの人影があった

「・・・大分制御できるようになつたね」

ルナは先程瞑想を終えたイザックにそう話しかけた

「・・・まあ最初よりは幾分がましになりましたね・・・」迷惑
を掛けました・・・」

「ほんとだよ全く・・・何回暗示に掛けられたことか・・・」

厄介だつたよほんとこ、とぼやくルナにイザックは苦笑を返す

「魔力を込めない通常の状態が”好意の錯覚”なんて将来絶対女
たらしになるね」

「ははは・・・」

最近では上手く制御できるようになったのだが”暗示”の制御の
練習中は
かなりしんどかった・・・主にルナが

「・・・いや・・・まさか、服脱いで迫つてくるとは・・・なん
でもないです・・・」

練習中のことを思い出し口にしたイザックだつたが物凄い形相でルナが睨んでいたので即座に話題を中断した

「・・・ま・・・あんたの初な反応もいつもと違つて可愛らしかつたけどね」

「・・・・・・」

形勢逆転である・・・ルナが迫つたときイザックの反応は・・・血の頭を思い切り壁にぶつけ・・・氣絶イザックが気絶した瞬間ルナは正氣を取り戻し・・・事なきを得たのだった

「・・・しうがないじゃないですか・・・女の人の扱いなんて知らないんですよし・・・」

「はいはい・・・そろそろ晩飯の時間だね・・・コリイ呼んできとくれ・・・

あたしは街に買出しにでかけたから

「了解です」

そう言つてルナは港町に向か歩いていき、イザックはコロイの部屋に向かうのだった

イザックSIDE・・・

「ンンン、と「ココイの部屋のドアをノックする

「はい」と中から可憐らしい声が聞こえた

「イザックだ、飯の準備するから手伝ってくれ」
「はい、わかりました・・・すぐ行くんで待つてください」

了承し、俺は先にキッチンに向かつた・・・

「・・・

あの後すぐにコリイは部屋から出てきたのだが・・・

「・・・

今日は何故かいつもより無口だ・・・

物静かな子だとは思っていたが今日はいつもと何かが違う気がした

「（なんかあつたのか？）」

そう思うのだがなかなか聞きにくく黙々と夕飯の準備をしていく
ちなみにコリイは準備等を手伝つてもらつてている・・・

すると突然・・・コリイが口を開いた

「・・・イザックさん・・・

「なんだ？」

いきなり話しかけられて多少あせつたものの何か言いたそうなコ
リイを見て

悟られないように問いかける

「・・・人間じゃないヒトって・・・どう思こますか？」

「・・・え？」

「・・・

いきなり、そんなことを聞かれ少し混乱する

「・・・別に、どうって言われても・・・」

「怖いですか？」

「それは無い」

俺は返答に困っているとコリイは「怖いか？」と聞いてきた
俺は自信を持つてそう答えたが、コリイにとつては以外だつたら
しい

「何故ですか？」

「・・・俺がもし種族差別してるような奴だつたらまずエルフで
あるルナさんに
会いに来たりしないだろ？それに・・・俺のいた孤児院にハーフ
エルフの子が
いたからな・・・」

「ハーフエルフ」・・・

その種族は人間とエルフの間に生まれ、人間でも、エルフでもな
い存在
そして、双方からも忌み嫌われる存在であった・・・

「・・・自分と違う種族・・・それが何だ？・・・人間だつて顔、
性別、性格と

一人ひとり自分とは違う・・・なら種族が違つてもそれは俺の中
では個性としてみる
・・・同じ・・・この世界で生きてるなら・・・そんなことでご
ちゃごちゃやってちゃ
いけないはずだ」

俺はそう自分が思つた意見を述べた

「リイはその意見が予想外だつたらしく・・・狼狽していた

そして・・・一言・・・

「世界中の人間が・・・イザックさんみたいだつたら・・・良かつたのにな・・・」

「・・・じつにう意味だ?」

少し泣き声でそう呟くコリイ

俺はその意味を尋ねた

「・・・イザックさん・・・私は人間ではないです・・・」

そう言い「リイは胸に手をあて、唇をかみ締めながら

「・・・私・・・天使なんです」

そう言つたと同時に・・・淡い水色の・・・透き通つた羽が姿を現した

第1-3話（後書き）

コリィの正体は”天使”でした

テイルズの天使は一般的に知られている天使の羽とは結構違いますよね？

作中にもあるように白い羽ではなく透き通った羽で人によつて様々
な色をしています・・・

何か意味があるのでしょうか？

私にはわかりませんが、天使のキャラ（クラースやコレット）は大
好きなので
いつか絡ませてみたいと思います^ ^

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第1-4話（前書き）

ルナちゃんが・・・

とりあえず投稿！

ZOSHIDE・・・

「・・・天使?」

「はい・・・」

コリイは震える声でイザックにそう告げた

「・・・私は・・・奴隸として・・・この国にきました・・・そしてその途中に私は逃げ出し・・・迷い込んだこの森でルナさんに拾われました・・・

ルナさんは人見知りとイザックさんに言いましたが・・・本当は怖かつただけなんです・・・自分が人間じゃないってことを誰かが知れば・・・また・・・あんな風に・・・人として扱われないんじやないかって・・・」

小さな拳を力一杯握りながらコリイは続ける
イザックは黙つてコリイの話を聞いていた

「この羽も・・・連れて行かれた貴族の人を見せたら・・・『気持ち悪い』つて
・・・その後違う場所に行くまでは・・・まともな扱いをしてく
れませんでした」

「コリイはイザックを見た・・・
大半が恐怖・・・そして・・・ほんの少しの希望が映る目で
そして・・・

「・・・・・イザックさんはどう思いますか？・・・・・」の羽のことや・・・

天使のこと・・・

そう「コリイはイザックに問いかけた

イザックは・・・少し何かを考えてから・・・・・「コリイに優しく笑
いかけた

「・・・・・さっきも言つただろ？俺は種族なんて気にしない・・・
天使だらうがなんだ

ろうがそれはそいつの個性だつて・・・それに・・・・その羽を気
持ち悪いって言つた

奴は目が腐つてるんじやないか？・・・・・「コリイのイメージに合つ
ていてとてもきれい
だと思つよ」

イザックはそう言つた・・・

コリイの目が見開かれる

そして・・・涙が溢れ出した・・・

「・・・・・すいません・・・・・っく・・・

そつとイザックは「コリイの頭に手を乗せる

「・・・・・もう・・・・一人で抱え込まなくていいよ・・・・・コリイは
もう、一人じゃない」

その言葉を聞き、コリイは声を上げて泣いた

今までどんなに辛くても・・・人前で泣いたりなんかしなかつた

そのコリイが・・・大声で・・・泣いていた
イザックは黙つて彼女の頭を撫でる
そしてイザックは彼女が泣き止むまで撫で続けた

「・・・大丈夫か？」

「はい・・・すいません」

一時間ほど泣き続け、コリイはようやく泣き止んだ
そしてイザックはコリイの肩に手を置き

「また辛いことがあつたらちゃんと俺かルナさんに話してくれた

らしい・・・

わかつたな?』

「・・・はい』

『コリイは頷きイザックは満足そうに笑った

「よし・・・飯は・・・」

「あ・・・」

「・・・あ!?」

・・・話をしていたのですっかり忘れていた
夕飯の準備がまったくできていない

そして・・・

『ただいま、今日の夕飯は・・・』

ルナが帰ってきた・・・

そしてルナは見た

料理を途中で止めている +

『コリイ涙目・・・+

イザック肩に手を置き若干青い顔 +

何故かはだけている服（コリイは泣くと胸元の襟を引っ張つて涙
を拭く）』

以下ルナの妄想

『イザックさん……やめてください……』

『ゴメン・・・もう我慢できないんだ』

『ダメ・・・嫌なの！』

『大丈夫……すぐに良くなる』

『あ・・・たぬえ！』

妄想終了

「イザックウウウ！－－－－！」

「 」

イザックは夕飯ができていないうことに怒られると思ったが・・・予想外のことにはまつぶつたる

「え? 何のことですか?」

「問答無用！！！天誅！！！！！！！！！」

その後何かを殴る音と一緒に一週間ぶりにイザックの悲鳴が轟くのであ
つた

「ロイ SIDE · · ·

あの後ルナさんの誤解を解くのに一時間、ようやく理解してくれ
たようだ · · ·

「はあ · · · 疲れた」

私はそう呟き自分のベッドに倒れこむ
本当に今日はいろいろあった

「(イザックさん · · ·)」

心の中で名前を呼んだ

私は・・・親の顔を知らない
物心ついたころにはすでに奴隸だった
そして貴族は私を人ではなくものとして扱っていた
男の人に犯されかけたことだってある
みんな・・・私のことを見てくれない・・・
そう思つてた

でも・・・あの二人は違つた

ルナさんは初めてここに来たとき空腹で死に掛けていた私に食べ物と居場所をくれた

イザックさんは他の人たちとは違い私の全てを受け入れてくれた
・

二人は他の人と違つた
必ず・・・

「私を・・・見てくれる」

そこが・・・違つていた

そして何より・・・嬉しかつた

「（生きてて良かつた・・・）」

心からそう思つた

「（それにしても……）」

ベットにこてて枕に顔をつづめながら先程のイザックの言葉を思い出す

『コリイのイメージに今ひとつもされいだと思つよ』

先程は嬉しかったが上回っていたので思わなかつたのだが……

「（は、恥ずかしい／＼／＼きれいって言われた……、いや羽のことがわかつてゐるけどきれいって……）」

初めて言われた異性の甘い言葉を思い出し赤面し、コリイが寝付いたのは
深夜になつてしまつたのだとか……

第1-4話（後書き）

はい、ルナさんが暴走しだしました＾＾；
クールキャラにしようと思つてたんですけど・・・やつぱり無理でした＾＾；
作者の力不足でして・・・許してください
感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです＾＾

関話・・・スキットー（キャラ崩壊注意）（前書き）

テイルズ＝スキット

といつあほな方程式が私の中にあります書いてみました・・・

それではスキット（？）をどうぞ・・・

闇話・・・スキットー（キャラ崩壊注意）

『リンの料理』

「いやイイザック・・・あなたの料理ほんとおいしいね！」

「それはどうも」

「・・・ちなみに・・・先生?つてひとの料理はどんななんだつたんですか?」

「・・・」

「・・・」

「あ、あの・・・びりして遠い田になつてるんですか?」

「・・・ルナさん・・・先生の一番ましな料理つてどんなのでした?」

「・・・オムレツだね・・・中の肉がアツクスビーグだつたけど・・・」

「・・・そうですか・・・俺のは・・・肉じゃがですかね・・・

ジヤガイモがさつま芋でした」

「一番ひどい料理は・・・」

「・・・（ガタガタ）」（急に震えだすイザック）

「イ、イザック! ? ロワイ! ! 精神安定剤取つとくれ! !」

「え”! ! は、はい! !」

『君もか・・・』

「練習終わつたな・・・今日の飯は何だイザック?」

「今日はコリイが作るって……」

「…
…
…
何?
」

いやだから…・・・

（急に血の氣をなくす）

「どうしました？」

「・・・ちよつと野に迷つてゐる・・・」

「…………」ワイヤー…………

「ヨーロッパの政治」

あ
川ナガさん
イサツケさん！

「！？」「（絶望に満ちた顔のルナ

「お! リイ・・・ それなんだと?

「何ですか? サンエドワードです! 」

「お！サンキュー・・・ルナさん食べないんですか？・・・なん

キュアボトル

二二二

持つてゐんですか

「・・・すぐわかる」

リ おいかわ 〔おいかわ〕

一
は
い

「
パクフ

「イザツカ!!! ）つかつ ）あああ!!! 欲め!! 早く飲めええ!!! 」

食め 旦ぐ食め
かにしきる

・・・あれ？」

の後日

「ええ・・・まさか・・・この吸血鬼の能力に助けられるなんて・

L

・・・いいかい？絶対にコリイに料理を作らしちゃいけない！」

「わかつてますよ・・・先生のよりひどいですから・・・」

たゞ三な・・・せなみに感想言へなひとんな感した?」

レバノン

「・・・フフフ・・・聞こえてますよ・・・全部」（田に光が無い）

۱۱

（ダツ）」（逃げ出す人）

「さあ逃がしません。」

「」

『年齡』

「イザックさんは年いくつなんですか?」

「17だ・・・」「コイは?」

「15です」

「2つ違いか・・・そんなに離れてないんだな」

「そうですね、イサツケさん大人っぽいですから」

「はは・・・思つたんだが・・・ルナさんつて何歳なんだ?」

「・・・気になりますね」

「・・・エルフは見た目は若いらしいからな・・・見た目は」（

大事なことなので2回言つた)

「そうなると・・・もしかしたら結構いつてるかも知れませんね」

「どうでしょ？・・・実は1000歳とか！！

「呪たの話は」かの作く歎たんだな（笑）

「全くですね」（微笑む「リイ」）

「……おい」（ドス聞いた声）

卷之三

（めかみの駕籠車にて）おまけに贈れまつ：：：：：

「…………（ダツ）――

「逃がすかああ！！！」

たすけてええええ!!!!!!」(泣きながら走りながら叫

心(ハリヤ)

「インプレイスHジド!!」

「ああああああああ……！」

「イザックさあああん！-！-！」

逃がさないよ……」「（趕趣いい笑顔のルナ）

閑話・・・スキットー（キャラ崩壊注意）（後書き）

それぞれのスキットで・・・ボケとシツ「!!」が違ってる・・・
どうでしたか？批判があつたら・・・次回は考えます・・・
感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第1-5話（前書き）

ついあえず投稿

次回からまた戦闘です

ルナSIDE・・・

「・・・やつと完全に制御できるようになったね」
「はい、おかげさまで」

イザックはそう言って笑う
この子が来て1ヶ月・・・よつやく3種類の”魔眼”の制御に成功した
といつても”魔眼”的御なんてやつたことも無いつえ、魔術の扱いも平凡だつた

イザックがこの期間で制御できるようになつたのは賞賛に値する

「さて・・・あたしはこれから『コイに魔術と』を教えるきやならないんだが

・・・一緒に来るかい？」

「そうですね、どうせ暇ですし」

イザックが一緒に行くといったのであたしは心の中でガツツボーッズした

「（あたしが楽だからねえ・・・）」

そう・・・イザックは飲み込みが尋常じゃなく早い
あたしが教えるのは水、風、土の魔術と『』、槍の武器の扱いだ
そして家の書物の中に回復術の本がある
それらをイザックと『』リイに教えているのだが・・・

「（イザックの奴・・・ほとんどマスターしてゐるからねえ・・・）

「

そう・・・この一ヶ月でほとんどマスターしてしまつてゐるのだ
『』ではまだ負けないが、槍術ではもつあたしでは勝てないレベル
にまでなつてゐる

それにこういった武術や魔術に対する貪欲さは半端が無かつた・・

回復術も本を読んでほとんど使えるようになつてしまつていた

「・・・全く・・・神は不平等だね」

恐らく彼の才能を見た人全員に共通するだろう
それほどまでにすごい奴なのであつた

「ルナさん？どうしました？」

「いや、なんでもない・・・『』リイが待つてゐ、早く行こ」

「はい」

コリイを待たしてはいけない、あたしはそう思い、急いでイザックに駆け寄つた

そして、彼のつける眼帯を見て一言告げた

「もう大体制御できるようになった、イザックもこれでやつと眼
帯がはずせるな」

あまりつけていて良く思われるものではないのをさう言つた
しかし、イザックから返つてきただのは意外な返事だつた

「やのことですが……これ、全力で戦うとき意外はつけとく」とこします

「……なんでだ？ 見た目的にも似合つてはいるが……」

イザックは苦笑しながら

「別にさうこつ意味じやなくて……ルナさんから貰つた品ですから」

そう言つた・・・

その一言にあたしは驚いた

「・・・そんなの気にしなくていいだぞ？」

「いえ・・・俺がつけておきたいんで」

はつきつさつきつた

「全く・・・」

ソフリットたソフリットは・・・ほんとソフリット供つぽにし・・・リンに似ている

薄く笑つて一言

「ガキ」

「・・・否定しません」

そう言つてやると拗ねたよしきを向いた

確かに・・・嫉妬するくらい才能に恵まれたイザックだが・・・
あたしの教え子には変わりが無い

だから・・・あたしは死ぬまで・・・この子を見て、いよいよと思つた
そして、力になれるなら・・・全力でこの子の力にならうと・・・
もうあたしの中では・・・この子もコリイも・・・大切な子にな
つていた

「早く行きましょう」

「ああ・・・」

そう思つているとイザックの声で現実に戻された
そして、イザックと共にコリイのところに向かつた

NOSIDE・・・

「悪いコリイ・・・待たしたな」

「いえ全然です、もう制御の練習はいいんですか?」

「ああ」

「もう大丈夫だよ」

ルナは短く肯定し、イザックは薄く笑つて答える

「じゃあ……』の鍛錬から始めよつかね……的用意してくれ

「はい」

「じゃあ俺は』の用意してきます」

「ああ頼んだよ」

いつもどおり、コリイの鍛錬が始まろうとしていた

そのとき・・・

「！？『リイ！…伏せろ！…！」

「え・・・？」

ルナの声に的を運んでいたコリイはしゃがみこんだ

ヒュン、と空を切る音がし・・・見ると木に矢が刺さっていた
コリイが立つていれば肩あたりに直撃している高さであった

「誰だ！…出て来い！…！」

ルナの怒声が響く

「・・・ちつ・・・外した・・・」

「当てるよアホ」

そして森の中から一人の人が現れた

「……何しに来た」

「……その天使……渡してもうおつか」

ルナの静かな問いに『』を持つ男が答えた

「そもそも……殺すぜ？」

もう一人の男……「ゴツイ団体に合った大きな斧を持っている男が舌なめずりしながらそう告げた

「……『リイをどうするつもりだい？』

「決まつてんだろ！……貴族に売り渡すんだよ……なあ？」

ビクッヒ『リイの体が震える

「……久しぶりだな、お前が逃げたせいで……報酬をまだも
らえてない」

「おとなしく捕まれ……な？」

ガタガタ、と震える『リイ

そこに……

「アクアエッジ」

「エアリスト！……」

「！？」

「一つの術が詠唱された……もちろん行つたのは……

「渡すかよ……お前らなんかに」

「イザックの『いつおつだ』・・・あたしが・・・『トイ』を纏るあ
んたたちを・・・

屠つてやるよ・・・」

怒りに顔を染めたルナと『いつ』をくし折つて怒りを示すイザックであ
つた

第15話（後書き）

はい・・・意味わからん=一人の登場です^_^；

感想アドバイスしてくれたら嬉しいです^_^；

書けたので投稿

ルナさん無双です

一つ名的なものが出できますが・・・すばしく安直です
ネーミングセンスが無いので・・・

それではどうぞ^ ^

ZOSIDE・・・

「ああん！？なめたこと言つアホ一人やな
「・・・邪魔するのなら・・・排除するぞ？」

斧を持つ男は不機嫌そうにこちらを睨み、弓を持つ男は無機質な
声でそう告げた

そんな二人を憤怒の表情で睨みつけるイザックヒルナ・・・

「上等だ・・・排除できるんならしてみろ・・・
「・・・身の程を知りな・・・糞蟲共
「・・・ルナさん、弓の男の相手してくださー」
「・・・そのつもりだったよ・・・口リイに矢を放つた男だよ?
ぼ」ぼこにしなきや気がすまないね」
「・・・じちやじちや何言つてやがる！..行くぞーー」
「・・・言われなくても」

斧の男が我慢しきれなくなつたのかこちらに突進してきた
弓の男は詠唱を始める

「・・・シャープネス
「爆碎斬！..」

補助呪文が詠唱された瞬間斧の男は得物を振り下ろす

「・・・なるほど・・・」の一人はコンビでそれなりにやつてき

てるようですね」

「……だね……まあ……あたしの敵じゃないけどね……

陽炎――！」

「――？」

素直に男たちの連携に感心していると、ルナさんが動いた。目標の真上に瞬間移動し、落下しながら蹴りつける技である「」を持つ男はルナさんを見失い、狼狽したところをルナさんが蹴りつける

「マーク――！」

「……仕事中は名前を呼ぶな……大丈夫だ」

マークと呼ばれた男はルナの蹴りを受け倒れそうになるが瞬時に受身を取った

「……あんたの相手はあたしだ……手加減しないから」

そしてルナは受身を取り膝をついているの男、マークを冷たい目で目で睨み

そう言い放つた……

イザックは……

「……おい、こりゃ……仲間の心配じゃなく自分の心配をしろ」

斧の男に……怒りを隠そつともせず、激怒した顔で睨みつけた。そして、戦闘が始まつた……

「……手加減しないといつてたが……得物も持たないあなたが……俺に勝てるとは思えないが？」

マークは警戒を緩める「となくルナに弓」を向けたままそう尋ねる。

「……そうだね、丸腰じや流石に厳しいね」

「……」

「でもね……あたしにあんな金属でできた得物なんていらない

んだ

「……何？」

意味がわからないといった風に再度狼狽してしまうと突然ルナは右手を横に突き出した

知ってるかい？」

「……昔……」この辺でちょっと有名だった“光の妖精”^{エルフ}つて

「……20年ほど前から姿を消したって言つあれか？」

「……そんな前だっけ？覚えてないわ」

「……それがどうした……つ！？」

マークは何の話かわからず立った風にルナを睨みつけるが・
すぐにその顔は驚き一色に変わってしまう

何故なら・・・ルナの手には淡い水色に光る・・・
槍が握っていたのだから・・・

「・・・魔力構成があたしの得意分野でね・・・水の魔力を具現
化して武器を
作れるのを・・・これがあたしの武器、『魔槍』・・・そして、
あたしが
さつきの話題を出したわけがわかつただろう? あたしがその・・・
”光の妖精”と
呼ばれたエルフさ! ! 手加減しない・・・徹底的に叩き潰してや
る! ! 光龍槍! !
「ちつ・・・! ?
「(上! ?) ・・・! !

マークは向かってくるルナの光龍槍を身をかがめて避ける
そして、彼女に向け『』を引き絞る、がそこに彼女の姿は無い

ザン、と先程まで彼のいた地面がえぐられる
「・・・瞬迅槍! !

しかし、そこからすぐさま攻撃態勢
マークは受け流すことができず直撃を食いつ

「ぐ・・・! ?

「天雷槍月！」

「がはつ・・・・・！」

マークは槍を叩きつけられ続く落雷もまともに受けてしまつ落雷を受け・・・電流が走り麻痺して動けないマークそこに・・・冷たい目で見下ろすルナの姿が見えた

「ひつ・・・・！」

「・・・あたしの・・・家族を侮辱したんだ・・・痛い目見ても

「みづひ

そう告げるとルナは詠唱を始めた・・・

マークは麻痺した体を必死に動かそうともがく・・・が結果は・・・絶対に覆らない

「くらいな・・・インブレイスエンド・・・

「うあああああああ！－！」

巨大な氷の塊を相手に落とす水属性最強術・・・インブレイスエンド

完全に格が違う強さを見せつけたルナ

下半身が下敷きになり・・・氣絶したマークを縄で縛りつけコリイのいる場所に戻る

「（コリイのところに行かないと・・・！？）」

こうして、マークは一撃も攻撃することが叶わず、ルナの圧勝に終わった

第1-6話（後書き）

ルナさん強すぎた感が否めませんが・・・
まあ相手がそんなに強くなかったんだと思つていてください^_^；

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^_^

第17話（前書き）

イザックの戦闘

魔眼を使っての初戦闘です！

イザックSIDE・・・

「おい兄ちゃん・・・悪いことは言わん・・・やることをやめな

斧を持った男が笑みを浮かべながら元気いっぱい歩近づく

「断る・・・せつかも言ひたはずだ・・・『ソレイは渡さないと』

「・・・こつちは商売なんだ」

「・・・人を売るのが商売?ふざけたことを・・・余計渡すわけにはいかない」

「そうかい・・・じゃあ・・・死ねよーーー」

やはり、強行策で来るようだ・・・斧の男は先程と同じように

ちらに

突進してくる

「おらあーー爆碎斬!!」

「・・・それしかできないのか・・・ーーー」

またも斧を地面に叩きつけ石つぶてを元気に飛ばしてくる
俺は剣を抜きその全てをはじき返す

「瞬迅剣!!」

「甘い!!発!!!!」

「ちつー?」

「おらあーー獅子戦吼!!」

イザックはすばやく剣を突き出すが、相手の鬪氣の爆発に吹き飛ばされる

受身に成功したがすぐさま斧の男はイザックを吹き飛ばそつと技を放つが・・・

俺は身を低くし、獅子戦吼をかわす、そして

「散沙雨！秋沙雨！」

「ぐお・・・ぬう」

「驟雨双破斬！――」

連續にして25回の突きを食らつた斧の男たまらずに膝をついた

「ちひ・・・・やみな兄ちゃん・・・・」

呻く斧の男はゆっくりと立ち上がった

「・・・・だが――負けるわけにはいかねえんだ――！」

「おおおお、と声を張り上げながら再び突進していく斧の男

「・・・・降参してくれれば楽だつたんだが・・・・いいだろひ

そう言ひイザックは眼帯をはずした

「・・・・”魔眼”壱の型・・・・発動・・・・『ビジョン・エターナ永遠の幻』――」

眼帯をはずした目を開く

そのままは・・・・真つ赤に染まり・・・まるで血のよつに濃かつた

そして・・・斧の男は・・・その田をしつかりと見てしまった・・・

男は意識が遠のき・・・視界は黒に染まつた

そして男は田を覚ました・・・

「あ・・・あれ・・・俺なんでこんなとこに・・・」

そして周りを見渡すと・・・見る限り荒野が広がつていた・・・

「（俺はたしか・・・天使を探しに森にいたはずじゃ・・・）」

ガチャーン・・・と金属の音がする

「あ・・・？」

振り返るとそこには・・・数え切れないほどの骸骨が・・・鎧と
剣を持つてこちら
に向かつてきていた・・・

「は・・・なんだよこれ・・・」

斧の男は後ずさり、逃げよつと試みるが・・・

「は・・・？なんで・・・いつの間に！？」

後ろには先程まで無かつた壁がそそり立つていた

ガチャンガチャン、と金属音が近寄つてくる

「く、くそおおおおおーー！」

覚悟を決めたのか、斧の男は骸骨の群れに突貫する

「おうあーーーー死ねーーーシネエエーーーー！」

斧を振り回し、骸骨たちを破壊していく・・・
が・・・

「がつ・・・・!？」

直後、腹部に痛烈な痛みを感じる

思わず斧を落としてしまい、骸骨の群れの中に消える

「ひつ・・・・!？」

そして、骸骨は剣を振り上げる・・・

「うわああああああーーーー！」

そしてまた・・・斧の男の視界は黒に染まつた

「はあ・・・！」「

斧の男は再び目覚める・・・・・周りを見渡すと・・・・・

（俺の・・・家？）

そう、彼の我が家だ
そして男は安堵したように息を吐く

「全部夢か・・・」

そう・・・信じたかつただろう

また。。。がチヤンがチヤン と金属音が響く。。。。

あ・・・・・
喰たゞ・・・・・

それで、一歩前に進む間に扉が閉まる

! ! ! ! !

その幻は・・・かけた者が解くまで永遠に続く
何度も死ぬ体験をしようと・・・いつまでも続く

「イザック！……」

ルナさんが一いち方に駆け寄ってきた、そして……

「あんた……魔眼使ったのかい？」

「はい」

白皿をむき、泡を吹きながら失禁している斧の男を見て
ルナさんは顔を引き攣らせる

「えぐいね……あんた」

「コリイを物扱いしたんですけど……」

そう言こきつた俺にルナさんは苦笑いをする

「『』のまつも捕縛しておいた、後で港町の駐屯兵どもに渡してお
くよ」

「お願ひします」

「……コリイのまつに行こう」

「……当然です。またあいつのことですかりきっと私のせいで
とか言つてると思つんで」

俺とルナさんは『』のまつに向かって元に走ったのだった

第17話（後書き）

はい、戦闘終了です^ ^ ;
いかがでしたか？

お見苦しい点は多々あると思いますが・・・
また感想などをもらえると嬉しいです^ ^

ちなみに魔眼の技名は『永遠の幻』をイタリア語にしただけです。・
それと、幻覚の種類は一応イザック自身がどんな感じの幻覚を見せ
るか
決めるという設定で行きたいと思います^ ^ ;

第1-8話（前書き）

「コトヤ SHOHEI です

どいわー！

「リイ SIDE · · ·

私は・・・矢の刺さった木の陰で震えていた・・・

「（また・・・あの人たちが・・・）」

忘れそうになっていた・・・いや、忘れたかつた記憶がまた蘇った
奴隸であることを・・・
そして・・・初めて優しくしてくれた・・・あの一人に迷惑を掛けてしまった
自分はここですっと震えていただけ・・・

「・・・やつぱり・・・私は・・・」

私は決意する・・・私がここにいたらきっと・・・また一人に迷惑を掛けてしまつ

「・・・ありがとう・・・ルナちゃん、イザックさん・・・さよな

「

私は歩き出す・・・恐らく近くに駐留しているであろう奴隸商人の一団を目指して・・・

そのとき・・・私の手を掴むものが現れた・・・

「どう行くんだいコリイ？」

ルナさんであつた

走ってきたのか呼吸を乱している

「・・・イザックさんは？」

・・・なんか、あの一人だけじやなかつたらしくてさ・・・
他のやつが攻めてきたから相手してやる。一人でいちゃ危険だから
あたしと一緒に・・・

・・・私・・・あの人たちのところに行きます」

私は正直にルナさんにそう告げる
瞬間、ルナさんの表情が固まつた

「…何言つてんだい？」

…………もう…………嫌なんです……私のせいでお一人に

「迷惑なんてあたしもイザックも思つてないよ」

…でもあたしはあくまで一人じゃねえでしょ？

今回みたいなことが起こっても……私は何もできないから……

迷惑を極めながら、三三九〇年九月廿九日、

「ダメだつて・・・」

モニ放しておいてくれたらしい。

私は止めてくるルナさんの手を振り払い叫ぶ

「私は！！奴隸なんです！！！そして・・・貴方達みたいな強さ無い

弱い子なんですか……止めるんですか……どうして

やせしぐ・・・ずるんですか・・・」

最後のほうは泣いてしまつていて上手くしゃべれなかつた・・・

「……迷惑がかかるつて……わかってるの元……どうして捨てないんですか・・・」

ボロボロと・・・落ちる涙
止めれずに流れ続ける涙を・・・ルナさんはそつと拭つた

「・・・あんたをあいつらに渡すなんて・・・できないよ・・・

生活

二二二

卷之三

「まだあなたもイザックもここに来て少ししか経つてないけど・・・
あたしはいつせ戻すと娘みたいに思つてゐ・・・あなたは遊び
だい?

・・・あたしは・・・・・もう一人と別れたくないよ』

ルナさんは・・・少し不安そうな顔をしながら私に問い合わせてきた

「・・・私 だつて・・・一 緒 に い た い で す・・・」

「なら……一緒にいよう……あんたに害する奴が現れたなら・

・
あたしとイザックが追い払つてやる・・・安心しな・・・モウロ
リイは

・・・一人じゃない

私は目を見開いた・・・
まだ涙は流れているが・・・少し笑つて

「イザックさんも・・・同じ」と言つてくれました

「・・・だらう?・・・なんだかんだ言つて・・・あの子はあた
しに似てるから」

ルナさんは嬉しそうに微笑んだ

そして・・・声が聞こえる

「・・・すいません!遅くなりました!」

「ああ・・・大丈夫だったかい?」

「ええ・・・どうやら最初に来た二人がトップの二人だったみた
いです

・・・数で襲おうとしてきましたが問題なく全員捕縛しました

「悪かったね・・・でもまあ・・・あんたの言うとおり、コリイは
やつぱり自分のせいだと思ってたみたいだね
「でしう?・・・全く・・・」

イザックさんは「うう」歩み寄つてきて頭に手を乗せた
そして・・・

「・・・もう少し・・・俺たちの」と信用してくれてもいいと思
うぞ

苦笑しながら呟つた

「同感だね」

けらけらとこつもどおり笑うルナさん

「さて・・・特訓はまた明日にして飯にしましょつか?」

「やうだね・・・ん?」

「どうしました?」

『飯にして」とこいつとなので家に入らつとするルナさんは立ち止まつた

「ああーーー? ゆ、弓が・・・」

「あ・・・」「

そう・・・ルナさんが作ってくれた自作の弓が真つ一本に折れて
るのだ

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

イザックさんに視線が集まる

たしか・・・

『渡すかよ・・・お前らなんかに』

『イザックの言つとおりだ……あたしが……『リイを縛るあんたたちを……

屠つてやるよ……』

つた
怒りに顔を染めたルナと弓をへし折つて怒りを示すイザックであ

ルナさんがイザックさんに怒り・・・そして必死に逃げるイザックさん

「」

そんな光景が・・・私は大好きで・・・二人のことを・・・信じてみようと思つた

私のことを・・・大切してくれる二人を・・・

第1-8話（後書き）

はい・・・どうでしたか？

コロイはこれから強くて優しい子にしていく予定です

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第1-9話（前書き）

ネタ回です^ ^ ;

コリイが明るくなる回にしようとしたら・・・
何故かこうなりました・・・
どういたしまして！

ZOSIDE・・・

そしてそれから一週間
コリイも前のよつな暗く無口な性格から一変し、たびたび笑顔を
見せ
三人で平和な生活をしていたのだが・・・

「・・・暇だな」
「そうですね・・・」

ルナとイザックは家の椅子に腰掛けそう呟いていた

あの奴隸商人どもはイザックの暗示でこの森での出来事を忘れさせ
した後、ルナが港町の

兵士に引き渡し、事件は解決した

「・・・そういうえばコリイはどうしたんですか?」
「わあ?・・・今日は朝からみてないね」

不思議に思った二人だったが特にどうといふことも無いのでスルー
そしてまた

「・・・假だな

…暇ですね…」

無駄に時間を過ごしている一人だつた

一方・・・コリイは

物凄い勢いで何かを編んでいた・・・
女物の服を編んでいるようだが・・・コリイが着るにしては大き
すぎる

そして…

「でせた・・・やつと」

疲れの色が半端無い顔だったが「リイは歓喜の声を上げた

その服はワンピース、薄い水色をしていてとてもシンプルなデザ

インである

「・・・ウフフ・・・楽しみです」

「コリイは笑みを浮かべた・・・その笑みはどこか異様な笑みであった

「暇だな・・・」

「そうつすね・・・もつ夕方ですよ」

朝から一人はこんな調子であった
ひたすらルナが呟き、イザックが返す・・・
ただそれだけで半日以上過ごしていた

そこに

「イザックさん……ルナさん……」

「コリイが現れた、後ろに何か隠した感じで……

「おう、コリイ……どうした? ってか今日なんで部屋から出でこなかつたんだ?」

「……それよりコリイ……田のくまがひびこよ? 寝てないのかい?」

イザックとルナはそれぞれ心配そうに声を掛ける
しかしコリイは嬉々とした表情で

「全然大丈夫です! ……それより一人とも……これ、どう思
いますか?」

そして先程から後ろ手に隠していたものを一人の前に出す……
それは

「……ワンドピース?」

「へえ……上手じゃないかい! 昨日糸をくれって言つてたのは
これを
作るためだつたのかい? ……それにしても、サイズでかくない
かい?」

イザックは出された服をみて不思議に思い、ルナはコリイが作つ
たそれの

出来を素直に褒めていた、そして一つの疑問……

そう……サイズが大きいのだ

「あたしでも大きいよ……採寸したのかい？」

「はい……もちろんです」

「ならなんで……」

「私でもルナさんのもりません……イザックさんに着て貰いますから」

刹那、時が止まった……

「「は……?」」

同時に声を上げたルナとイザック

「ですから……イザックさんに着てもらいます」

「……ちょっと待て、何で俺……?」

「そんなの簡単です……似合ひそつだからです」

「なんてシンプルな理由なんだ……」

「感心してゐる場合じゃないでしょ!/?」コロイ……俺は男だ

「百も承知です」

「なら……」

「一生懸命作つたんですね……着て……もらえませんか?」

「ぐ……」

イザックは何か逃げようとするがコロイのねだる顔にたじろぐ

「リイはつい先日辛い目にあつたばかりだ、だから自分のできる

ことなら

やつてあげたい……が

「……流石に……ちょっと」

イザックも男であり着たくは無いだろう……

しかし・・・

「面白そうだ・・・着ろ」

「ルナさん！？」

「だつてほんとに似合いそうだし」

そう言つていつものよつにけらけらと笑うルナさん
確かに、ルナのいうとおりなのだ

長く、白く、後ろで縛つている美しい髪
中性的ながらも可愛らしい顔
スラッシュとした細身の体型
長い足に、縛つた髪の影響で覗くうなじには色氣があるよつに見
える

「・・・ちよつと・・・失礼・・・！」

マジで危険な空氣になつてきたので全力で逃げ出すイザック
が・・・

「ライトニング」

「ぐわつー？」

・・・見事にコリイの術がイザックに命中
イザックの全力の走りは目で追えないほど早いのに・・・恐るべ
しコリイ

「でかしたよーーそれーー」

それを見たルナがビックから出したのかロープでイザックを縛る

「ちよつとー…ほんとこまつ・・・・・」

「「着せ替え〜〜〜！〜〜〜！」」

「やめてくれええええ…・・・・・」

数分後・・・・

「やつぱつ似合ひね

「でしょう・・・私にも生きがいができました

「・・・もうヤダ・・・・」

いつもと同じく笑うルナと頬を赤らめつゝいつする「ココイ
そして・・・絶世の美女とこいつても過言でではない姿となつたイザ
ツク

その顔には疲労と絶望・・・羞恥ととにかくこころの混ざつた顔
をしながら

泣いていた

「次はどんな服がいいでしょつか?」

「メイド服とか?」

「やめろおおおお！〜〜！」

「いいですね!猫耳もつけてましょ〜〜！」

「聞けええええええ〜〜〜！」

コリイは明るくはなってよかったですのだが・・・イザックはこれから
心に
傷を負つことになるのだった・・・

第1-9話（後書き）

イザックの容姿は・・・一応女よりの中世的ところとで・・・
・・・女装することになりました・・・

容姿の説明つて難しいですね・・・

それぞれ皆さんはどんなイメージを持つてるんでしょうか?

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第20話（前書き）

とうあえず投稿

今日は吸血鬼関係の話です

どうぞ！

イザックSIDE・・

奴隸商人の件も片付き、コロイにも笑顔が戻り平和な日が続いた
しかしその日々は、急に終わりを告げた

深夜・・

ほとんどのものが眠りに落ちているであろうこの時間帯
俺は体に異変を感じ、苦しみの中にいた

「・・・ぐ・・・がは・・・・！」

体が・・・焼けるよつに熱い・・・眼帯に隠している眼からは血が
流れ落ちていた・・・

「（この感覚・・・あの時と・・・）」

そう・・・酷似していた

彼が人間ではなくなつた・・・あの時の感覚に

「（つ・・・へ）」「（

必死に痛みを堪え、耐え続ける
しかし・・・

意識は拒んでも……体は違つた……
気づけば俺は……動いていた

ルナSIDE……

私は……異様な気配を感じ取り田を覚ました

「（何だこの気配……）」

警戒し、ソロイの部屋に移動しようとしたとき

目の前に一つの人影が現れた・・・

「・・・イザック?」

声を掛けるが返事が無い・・・
いつものイザックではない
なにかが・・・何かが違っていた

「ル・・・ナ・・・ざ・・・ん・・・逃げ・・・」

ここまで言うとイザックは・・・剣を手に襲い掛かってきた

NOSIDE・・・

ギイン、と響く金属音

ルナは咄嗟に魔力を練り槍を作りだし、イザックの攻撃を受け止める

「イザック…どうした…？？」

ルナは明らかに動搖していた

「…ぐ…から…だが…い…」

途切れ途切れに言葉をつむぐイザック

しかし、イザックの体は剣を振りかぶりルナに迫っていた

「…つぐ…」

「ウウウウ…！」

苦しそうに呻くイザック

そしてルナの頭に一つよぎった文があった

それは…昔研究していた…吸血鬼について…

それは…

『吸血衝動』である

それは、どうしても抑えられない吸血鬼の特性

それは理性では制御できず、異性の血を本能のまま求めるものだ

「（…最後にイザックが血を吸つたのは…確かにエリックの血…異性の血
でもなければ舐めただけ…）…！」

剣を振り下ろし、ルナの槍との鎧迫り合いとなる
ルナが分析している間もイザックは襲い掛かってくる

「（…………とりあえず動きを封じ…………）…………何つ！？？」

動きを封じることを前提に戦うことを決めたルナだつたが
その前にイザックが行動を起こした
なんと、鍔迫り合いをしていたルナの魔力で作つた魔槍に噛み付
いたのだ

そして、『魔槍』は消えうせ、イザックの剣はルナを斬り裂いた

「くつ・・・・！？」

肩から血が流れ出す、痛みに一瞬氣をとられる
そして・・・

ダン、と音がなるほど勢いよくイザックは床を蹴り・・・

「ガハッ！？」

ルナの首を片手で持ち、そのまま上に上げた

「がつ・・・・」

息ができず、苦しむルナ
もがきながらイザックを蹴りつけるが全く動じない

そしてイザックは・・・鋭利な犬歯をむき出しにし・・・
ルナの首元に顔を近付ける・・・

「（…………殺られる・・・！？）」

そう思い田をきつく閉じた・・・そのとき

「ウインドカッター！！」

小さな風の刃がイザックを切り裂いた

「・・・つ！？」

突然の攻撃を予期してなかつたのか、腕の痛みに思わずイザックはルナを落とした

その隙にルナは床を蹴り後退する

「・・・」ほ・・・すまない「リイ・・・助かつたよ」

「いえ・・・あれは・・・イザックさんですか？」

「ああ・・・暴走してゐみたいだが」

ルナの窮地を救つたのは「リイ」だつた

恐らく物音が聞こえたので駆けつけたのだろう

「・・・どうしましよう？」

「一旦氣絶させるしかないね・・・」

ルナはそう言つてまた『魔槍』を構成した

「・・・『リイはとにかく術・・・当たるまでの時間はあたしが稼ぐから・・・」

「・・・自信ないですが・・・やります」

そうルナはいい『リイの返事を聞いてから突進した

第20話（後書き）

どうでしたか？

やはり吸血鬼といえばこれになるかなと思いまして・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第21話（前書き）

ついあえず投稿・・・

ZOSIDE・・・

キン、ギイン、と甲高い音が鳴り響く

「・・・くつ・・・瞬迅槍！！」

ルナは渾身の力を込め槍を突き出すがイザックは軽くその槍を弾く

「アア！！」

弾いた隙に剣を横なぎに振るう
ルナはジャンプして何とかかわす

「旋風槍！！」

着地してすぐにルナは魔槍を横に振るい、真空波を発生させる
それは見事に命中し、イザックに傷を負わせる・・・が

「・・・・・・・」

「・・・すぐに治っちゃうねえ・・・ホント、敵に回すと厄介だ

「ね

切り裂いた箇所が徐々に回復していくのを見てルナは呻いた

「ライトニング！！」

「リイの術が完成した・・・しかしイザックはいとも簡単にかわしてしまつ

「（動きを止める・・・ダウンをせるしかないかね）」

ルナはそう考えるが・・・

「・・・」

「（・・・隙が無いんだよね・・・）」

元々隙が少ないイザックだつたが今はいつも以上である寸分の隙も見せないイザックにルナは焦り始めている

「・・・！」

「・・・つく！？」

そして、攻撃の出だしを全く読めない太刀筋・・・過去にルナが戦った相手でもここまでとの者は数えるくらいしかない

「・・・でやあ！！瞬迅槍！天雷槍用！！！」

突きの後、ジャンプしながら魔槍を叩きつける

そして、イザックは剣で受け止め、直後その脳天に雷が・・・落

ちなかつた

「ちつ・・・ほんとに厄介だね」

恨めしそうにルナは呟く

イザックはルナの槍を受け止めた瞬間半歩後ろに下がり、落雷を

くらわなかつた

「（あたしの唯一ダウンを取れる技だつてのに・・・）」

ルナが覚えている技にはダウンを取れる技は「天雷槍月」しかない
これが効かないとなると、やはり気絶させるしかないのだが・・・

「（コリイの術は当たりそうにないし・・・参つたね）」

八方ふさがりである

そして、イザックはまた動き出した

すぐさま槍を構えるルナ

しかし・・・イザックはルナを飛び越えた

突然のことに一瞬硬直するルナ

そして、イザックは突進した・・・狙つのは・・・コリイ

「コリイ！！」

「！？」

ルナは叫びながらイザックを追うが、純粹な身体能力ではイザックのほうが上

追いつくことはできない・・・

そして、イザックは詠唱し、無防備になつてゐるコリイに剣を振り上げた・・・

その姿を見たコリイはきつと眼を閉じ・・・殺されると思つた

が・・・

いくら経つても剣で斬られる痛みは来なかつた

恐る恐る眼を開けると・・・

剣を持っていた右手が・・・彼の左腕によつて抑えられていたからだ

「イザック・・・さん?」

「・・・ぐ・・・ぎ・・・」コソイ早く・・・

苦しそうにイザックはいつも声で答える

「まさか・・・吸血鬼の衝動に・・・イザックの理性が勝つてると
だと・・・ー?」

ありえない、やつ思つたがルナは一回考えるのをやめ

「コリイー詠唱!!あたしもやる!!イザックの理性があるのつ
いやるよー!!

「は、はい!!」

そして・・・

「「ライアリング!!」」

一つの雷がイザックを襲い、その場にイザックは倒れこんだ・・・

そして一人はイザックを縛り、居間で彼の目が覚めるのを待つた

「・・・ん・・・ぐ」

「目が覚めたかい？」

イザックはうつすらと目を開けるとルナの顔が見えた

「・・・大丈夫かい？」

「・・・なんとか

そうかい、トルナは言つとイザックの目の前に座つた

「・・・異常があつたなら、ちゃんと言わないとわからないだろ
う？」

「・・・すいません」

「まあいい・・・恐らく、さつきのは”吸血衝動”だろうね」

「”吸血衝動”？」

「ああ、吸血鬼は異性の血を飲まないと理性を保てなくなる、理性を保てなくなつた

吸血鬼は異性の人々を襲うようになる・・・これが吸血鬼が恐れ

られる理由の一つだね」「

ルナはそこで言葉を切った

イザックは不安そうにルナを見つめ

「……これから……またこんな風に、一人を襲ってしまうんでしょうか?」「

そう尋ねた……

もし、 そななら……自分は一人が止めたとしても出て行くつもりだ

そう思つたが……

ルナは薄く笑つて

「大丈夫、ちゃんと暴走しないようにする方法はあるよ」

そう優しく答えた

「何をすればいいんですか?」「

「簡単さ、理性があるうちに血を吸えばいい……」

なんともシンプルなものだつた

「……それだけでいいんですか?」「

「ああ……少なくとも暴走はしないだろ?」

ルナさんはそう答えた後……」ちらりと首を傾げたまま近寄ってきた

「ルナさん?」「

「吸いな・・・また暴走されたら敵わないしね」

「うーん、と首を出してくるのだが・・・

「（・・・地味に恥ずかしい）」

イザックは顔を赤くしてそう思つていた

ルナは美人だ

そんな彼女が髪を片手でたくし上げ首元を晒している
(ちなみに今は髪は下ろして いる)

妙に色っぽく、吸血するといふことは顔を近付けるといふことだ

「・・・／＼／＼」

「？？？」

イザックの顔が真っ赤になつていることに気付き、ルナはイザックに問いかける

「・・・いや、その」

「・・・・・恥ずかしいのかい？」

「うぐ・・・」

見事に的中し、イザックはさらに顔を赤くする

「全く・・・かわいい所もあるじゃないかい」

「からかわないでくださいよ・・・」

ちょっと拗ねた感じに唇を尖らせるイザックにルナは笑みを浮か

べる

「でも吸わないとまたああなるよ」

「・・・・・」

真剣な顔でルナはそう述べる

「・・・すいません・・・失礼します」

「ああ・・・死なない程度に吸つてくれよ?」

「わかつてますつて・・・」

そう言いイザックはルナの首元に顔を近付けた・・・

第21話（後書き）

ん～・・・悩んだんですがこいつなりました
しかしあれですね・・・文字で説明するもってほんとに難しいです
ね・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^ ^

第22話（前書き）

とうあえず投稿・・・
次の次の回から戦闘予定です

ZOSIDE · · ·

朝・・・イザックにとつて眠くなり始める時間だったが・・・
居間では顔に艶があるものの申し訳なさそうに視線を落としているイザックと
・・・やっぱ『ぐら』やつれているルナの姿があった

「・・・ルナさん大丈夫ですか?」

「・・・ああ」

コリイがルナに声を掛けるが、その声には全く霸気が無い

「ほんとにすいません・・・」

「いって・・・あんたが気にすることじやないよ」

そう言い微笑むルナだが・・・そんな青白い顔で言われても
イザックの気は
晴れなかつた

「・・・おかゆなら食べれますか?」

「・・・ああ・・・頼むよ」

イザックは立ち上がり、キッチンに向かつた

ルナがやつれている原因はもちろん、昨日の吸血にあつた

あの後、イザックは初めての吸血だったので、要領がわからず・・・

少し血を吸いすぎてしまつたのだ

そのせいでルナは貧血を起こし、体調が悪い

「・・・まさかこんなになるなんて思つても見なかつたよ・・・」

ルナがそう呟くとコロイは苦笑を返す

「次回は私がやりますから」

「・・・きつこよ?」

「大丈夫です・・・イザックさんのためですから」

と少し顔を赤らめて言つコロイ

その顔を見た瞬間ルナの顔に幾分か血の気が戻つた

「・・・あんた、イザックのこと好きなのかい?」

「ふえ!?」

いきなりそんなことを言つ出すルナにコロイは素つ頓狂な声を出してしまつ

「い、いきなりなんですか!?」

「いや、ちょっと気になつて・・・でどうなんだい?」

「し、知りません・・・」

パイッとそつぽを向くコロイ

「初々しいねえ・・・」

ルナはそう呟き微笑んだ

「できました、どうぞルナさん」

「悪いね・・・いただきます」

「イザックさん、私もおなか空きました」

「ん？そつか・・・なら・・・卵焼きとカラダならあるが

「食べます！」

「じゃあ、運ぶの手伝ってくれ

「はい！」

コリィはイザックの料理を運ぶためキッチンに向かう

平和な日々が・・・続いていた

しかしそれは・・・長くは続かなかつた

「あああああーー！」
「はあーー！」

森の奥、戦っている二つの人影

イザックとルナだ

二人はそれぞれの得物を持ち今模擬戦中である
そして・・・

ギィィィィン、といつも異常の甲高い音がなる
イザックの剣がルナの魔槍を弾き飛ばしたのだ
魔槍はルナの手元から離れて地面に落ちると溶けるように跡形も
無くなくなつた

「ふう・・・もうあんたに近接じゃ勝てないね・・・強くなつた
ねえ」
「ありがとうござります」

ルナは呆れた視線を向けるがそれはどこか嬉しそうで
イザックもそれを感じたのか素直に礼を述べる

「・・・さて・・・コリイ！そろそろ飯にするよーー！」
「はあーーーーー！」

ルナが呼びかけると回復術の本を呼んでいたコリイが返事をし
に向かって走つてくる

今日の昼は何にしようか・・・そう考えていたとき・・・

「ここにいたか・・・全く、面倒掛けやがって・・・」

一人の男の声がした・・・
振り返ると黒い髪をただ短く切つただけといつ髪型をし、無精ひ
げを生やした

一人の男が立っていた

第22話（後書き）

新たな波乱・・・ところが予定です^_^；

まあ頑張りますのでお暇でしたらまた見てやってください^_^

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6388y/>

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～
2011年11月30日19時51分発行